

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙I 3章1〜9節>

①この手紙でこれまでに語って来たことは？

この手紙の本文の書き出しは、コリントの教会内で起こっている分派争いについてでした(1:10以下)。パウロはその後、キリスト教信仰の中心であるイエス・キリストの十字架の死が持つ意味について語って来ましたが(1:18以下)、ここでまた分派争いに戻ります(3:4以下)。そこには、分派争いをする姿そのものが、キリストの救いを分かかっていないことを示しているのではないか、というパウロの主張が読み取れます。「**相変わらず肉の人だからです**」(3:2-3)。正しいことを追求するために分派争いとなる場合もあるような気がします、一体何が問題なのでしょう？

②熱心であることは良いことだとは言えない！

パウロはここで、分派争いに「ねたみや争い」を見えています。「**お互いの間にねたみや争いが絶えない以上、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいる、ということになりはしませんか**」(3)。ここで「ねたみ」と訳された元のギリシア語ゼーロスは「熱心」とも訳される言葉で、パウロ自身、自分のことを「**熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした**」と語っています(フィリピ3:6、ローマ10:2も参照)。正しさを追求する熱心さが(分派)争いを生むなら、それはもう「**ただの人として歩んでいる**」(3)のだというのです。それに対してパウロは何を語っているのでしょうか？

③この神に目を向けて生きるとき、争いは止む。私たち(教会)の務め。

パウロは、神様に目を注ぐようにと語ります。「**大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です**」(7)。キリストの十字架の死によってしか赦されない罪(神に背を向けていたし、また今も向ける)を負う私たち。しかし、またそれによって確かに赦される恵みを知る私たち。この神の赦しの恵みを覚えて生き、この恵みを伝えるために力を合わせて働く時に、私たちは「**神の畑、神の建物**」(9)となり、争いはなくなるはずだとパウロは教えているのです。